

TOKUMA NOVELS

卒業旅行

They are going to a magical mystery tour.

赤川次郎

長篇ミステリー





TOKUMA NOVELS

赤川次郎

卒業旅行

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区東新橋一ノノ一六 一〇五八〇五五

電話〇三・三五七三・〇一一一

振替〇〇一四〇〇四四三九二

©Jirô Akagawa 2000 Printed in Japan

落丁・乱丁はおとりかえいたします

〈編集担当 松尾賢次／販売担当 山田章治・益子 光〉

ISBN4-19-850490-3

長篇ミステリー

卒業旅行

赤川次郎



TOKUMA NOVELS

卒業旅行

插画・峰岸達

11	すれ違う思い	98
10	ネズミ狩り	89
9	暗黒	79
8	キャンパス	70
7	破産	61
6	ボーイフレンド	53
5	バーコード	47
4	靴	39
3	苦痛	31
2	沈黙の家	22
1	再会	12
	プロローグ	9

	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
エピソード	温泉	旅行	来週へ	不運	変身	休息	襲ってくる闇	単位	代理人	急流	裏切りの報酬
216	202	190	181	171	164	155	147	136	128	115	106

プロローグ

手帳を開いたのは、偶然だった。

——デートの帰りは、いつもたいていもつと遅くなる。

でも今夜は……。

加奈子は、彼との間に冷たい風が吹き始めていることに気付いていた。食事のときから、何となく気

まずい沈黙が多くて、その後ホテルへ入っても少しも燃えなかった。

いつもなら、すんだ後でも、

「泊って行こう」

と、彼の方が言っ

「帰るだけ帰らないと、うちでうるさいから」

と言う加奈子と、毎回同じやりとりをくり返すのだが、今夜は違っていた。

「明日早いんだ」

と、彼が早々と服を着て、「先に行くよ」

と、加奈子がシャワーを浴びるのを待たないで出て行ってしまった。

次の約束もせずに別れるのも初めてで、もしかすると、もう連絡して来ないかもしれない、と加奈子と思った。

そんなわけで、夜の九時前には地下鉄に乗って、家路についた加奈子だった……。――

「――今日だったんだ」

座席に落ちついて、明日の土曜日、何か予定ってあったかしら、と手帳を開いてみた。

最近、PHSやEメールで連絡し合うことが多くて、手帳なんかあまり見なかった。

久しぶりに開いた今週のページに、〈卒業旅行打ち合せ〉という、自分の読みにくい字を見て、初めてそんなことがあったんだと思い出した。

「金曜日の八時……」

腕時計を見ると、八時五十分だった。――待ち合せは、大学に入りたてのころ、よく集まったイタリアレストラン。ピザやスバゲティを分け合って食べた、あの店はまだあるだろうか？

ふと地下鉄の駅名を見ると、ちょうどそのレストランに一番近い駅へ着いたところだった。

反射的に、手帳を手を持ったまま加奈子はホームへ飛び出していた。

ドアがすぐ閉り、電車が動き出す。

ふと目がさめた気分で――。

「卒業旅行なんて……」

大学の四年間で、何て色んなことが変わってしまった

たことだろう！

でも——でも、もしかして——。

加奈子は、地下鉄の駅から足早に階段を上って、通りへ出ていた。

一月の末、寒さの厳しいころである。

都心とはいえ、風の冷たさは変りない。——彼との間だけに北風が吹いているわけではなかった、と思つて苦笑した。

あの店。——そうだ。あのレストランだ。

加奈子は、レストランの前に立つて、ためらつた。来ているわけがない。みんな、加奈子に会いたくないだろう。

でも……ここまで来て帰る？ それなら、ちよつとだけでも中を覗いて……。

迷いに迷つて、沢田加奈子は、レストランの扉を押していた。

チーズの焼けた匂い。それは一瞬の内に加奈子をあのころに連れ戻した。でも、やはり誰も来ていない——と思つたとき、

「加奈子！ 遅いよ！」

と、奥の席から元気な声が飛んで来たのだった。

1 再会

「じゃ、ピザの追加ね」

と、かおるがメニューを見て言った。

「ちよつと！ こっち！」

週末で、混雑する店内でも、かおるの声はよく通った。

「相変らずね、かおるは」

と、友江が笑う。「その元気、少し分けてよ」

「百グラムいくらで？」

と、かおるが言い返す。「いいよ、分けても。その代り、列車代、持て」

「ともかく、ワイン飲もう」

加奈子は、胸が熱くなっていた。

「最近ワインなんて飲まないな」

と、かおるが言った。「日本酒専門。何せ米どころだからね」

「そうか。——どう、向うの暮し？」

と、加奈子は訊いた。

「楽しいよ。ま、二十四時間オープンのコンビ二はないけど、レンタルビデオの店もちゃんとあるし」
南村かおるは、大学でもいつも「一番にぎやか」な存在だった。今も少しも変わっていないのが、ふしぎと言えふしぎだった……。

「でも、よく出て来られたわね」

と、友江が言った。

「親友との約束を忘れるかつて！ 一年生のとき、四人で誓ったんじゃない。四年生の一月のこの日、卒業旅行の打ち合せをするんだって」

「憶えてんだ……。嬉しいわ」

加奈子は、ほとんど涙ぐんでさえた。

「加奈子ったら、老け込んだんじゃない？」

そんなに涙もろくなつて」

と、かおるが笑う。

「加奈子とかおると……。これで、由紀子が来れば、

四人揃うのにね」

伊地知友江は言った。

K女子大に一緒に入った四人。——四年生の今、

K女子大に通うのは、加奈子と伊地知友江の二人だけである。

「——由紀子、何してんの、今？」

と、かおるが言った。

「働いてる。——最後に会ったときは、スーパーのレジにいたけど……」

と、友江が言った。「ね、加奈子、スパゲティ、半分食べない？」

「あ……。うん、もらおうかな」

お腹が空いているわけではない。彼氏と食事はしていたのだから。

でも、昔のように「分けて食べる」ということが、嬉しかった。

「由紀子は来ないだろうな」

と、かおるが言った。「それどころじゃないだろうしね」

「卒業旅行っていつても、由紀子もかおるも中退だから……」

「友江、やめようよ、その話」

と、加奈子が言った。「今夜、こうして会えただけで嬉しい」

「うん……」

「あら、何よ」

と、かおるが口を出して、「卒業旅行、やるんですよ？　行こうよ！　私も仕事休んで行くつもりよ」

「休めるの？」

「馬鹿にしないでよ。こう見えても、いてもいなくても同じなんだから」

「変な自慢」

と、加奈子は笑ってしまった。

「じゃあ……三人だけでも行くか」

と、友江が言った。「遠出しなくてもね。どこか手近な温泉とか」

「温泉か！　いいなあ」

かおるがウットリと、「一年生のときの話だとき、確かヨーロッパ旅行じゃなかった？」

「そうだった。ヘロマンチック街道に行く！」って旅にしようと言って……」

加奈子も思い出していた。

「この間、あのときみんなで『このコースがいい！』とかって盛り上ったパンフレットがね、引出しの奥から出て来たの」

と、友江が言った。「それを見て思い出したんだ、今日のこと」

「あれから、もう四年近くもたつんだね」

と、加奈子は言った。

何となく、かおるも黙ってしまい、三人のテーブルは静かになった。

加奈子は、ほとんど無意識の内に、かおるの方へ

向つて、

「ごめんね」

と、頭を下げていた。「本当に、ごめん」

「加奈子……」

かおるが加奈子の腕をつついて、「よしてよ、ねえ。——加奈子が悪いなんて、誰も思つてないよ」

「でも、うちの父が……。あんなことさえしなかったら……」

「仕事だつたんだもん。仕方ないよ」

「そうよ、加奈子」

と、友江が肩に手をかけて、「友情には関係ない。そうでしょ？ 親たちは親たちよ」

「でも、そのせいで、かおるも由紀子も、大学を中退しなきゃいけない……。私、父を恨んだわ」

加奈子はそう言つてから、「いいえ、今でも恨んでる。あれから何カ月か、口もきかなかつた。今は

そんなことないけど……」

「加奈子のお父さんだつて、苦しんだよ、きつと」

かおるの言葉に、加奈子の目から大粒の涙が落ちた。

「いやだ。湿っぽいの、よそうよ」

と、かおるがワイングラスを空けた。「さ、飲んで騒いで——」

「かおるの方が變つてゐるのよ」

と、友江が苦笑した。

「でもね、やつぱり知らんぷりして、温泉に浸つてゐるわけにはいかないと思うんだ。私、今は父と話もするけど、でも心を開いてないもの。もう父は私にとっては他人」

加奈子はそう言つてから、「——その父のお金で大学へ行き、アルバイトもせずに遊んでるんだから、勝手と言われりやそうだけど……」